

## 文学博士新關良三君の「ギリシヤ・ローマ演劇史」に対する授賞審査要旨

新關良三君は一九一五年に東大卒業、一九二二年には東大文学部に於いてギリシヤ悲劇の講義を始めた。一九二二―二六年在外研究生としてドイツ、オーストリア、スイスに滞留、それまで二年間の講義を整理して、「希臘悲劇論」二巻として刊行した。留学中は主としてスイスのベルンとドイツのベルリンに滞在し、図書館に通つて、日本では手にすることのできない書物や専門雑誌等を読み、研究資料を集め、帰朝後更に研究をつづけ、一九四三年頃にはギリシヤ及びローマの劇に関する研究をまとめ、一九四三年六月から出版を始め、一九五七年十一月までに七巻四四九六頁に及ぶ大著述を發行した。

- (1) ギリシヤ演劇史概説(初版一九四三年六月。新刊一九五七年五月上旬、序一六頁・緒言一四頁・本文八二四頁)
- (2) アイスキューロス・ソポクレス(一九四三年十二月初旬アイスキュロス刊行、一九四四年九月初旬ソポクレス刊行。一九五七年七月二十五日二巻を合せギリシヤ・ローマ演劇史<sup>2</sup>)として刊行。序一三頁・本文九八二頁)
- (3) エウリピデス(一九四八年八月下旬上巻刊行。一九五六年九月上旬上巻に未刊行の下巻を合せ、ギリシヤ・ローマ演劇史<sup>3</sup>)として刊行。序一〇頁・本文六四〇頁)
- (4) ギリシヤ・ローマ演劇史<sup>4</sup>、アリストパネス・メナンドロス(一九五七年一月三十一日刊行。序八頁・本文三

(5) ギリシヤ・ローマ演劇史5、ローマ演劇史概説(一九五七年五月十日刊行。序八頁・本文五四〇頁)

(6) ギリシヤ・ローマ演劇史6、ブラウトウス・テレンティウス・セネカ(一九五七年九月三十日刊行。序七頁・本文六九〇頁)

(7) ギリシヤ・ローマ演劇史7、ギリシヤ・ローマ演劇図録・総目次・全索引。序八頁・図版二七二頁・図版解説・総目次六〇頁・索引二三頁。(一九五七年十一月十日刊行)

まず著者の研究態度に就いて述べれば、著者はギリシヤ・ローマ演劇に関し、二千三百年間にわたる古今学者の言説を集め、それを整理し、その諸言説の間にひそむ矛盾と合致点とを明示することによつて、対象に照明を与えつゝ、自説を述べるような周到慎重な叙述のすすめ方をしてゐる。本書が四五〇〇頁になつたのもこの周到さのためである。本書は、その故に、著者一個人のギリシヤ・ローマ演劇の文学的研究たるに止まらず、また古代及び近代のヨーロッパ人の研究及び言説を集め、それを整理せんとした試みとも見ることが出来る。

以下本書の内容及び学問的価値に就いて簡単な紹介批評を試みる。第一巻はギリシヤ演劇史概説で、その第一章はギリシヤ悲劇の起源、展開、性質、サテュロス劇(一一二七五頁)、第二章はギリシヤ喜劇の起源、展開、性質(二七六―四九六)、第三章ミモス劇(四九七―五二四)、第四章ギリシヤ劇場(五二五―六二二)、第五章ギリシヤ演劇理論(六二二―八〇六)に分たれている。悲劇及び喜劇の起源論を除いては、過去の文献及び諸学者の言説に対する考察の精密にして透徹せることに何人と雖も敬服するであらうが、起源論だけに關しては多少の異説があり得るように思う。

著者はギリシヤ文学發生の順序としては、抒情詩、叙事詩、最後に最も若い芸術として劇詩が現われた（序八頁）とし、しかし演劇的要素の最も原始的なものは、人間の身体そのものの動作であるから、それは語ることに、歌うことよりも早かつたに相違なく、演劇は芸術の始めであり、終りである（序一〇頁）という。そしてギリシヤ悲劇及び喜劇が古代宗教特にディオニソス崇拜の祭礼的行事のうちから發生したことを認める。そうとすれば劇の起源の研究は古代宗教の比較研究や考古学的研究を顧るべきであると思われるが、原始的な宗教的行事、或は原始劇は湮滅に歸して、その実体を捕える方法なく、三千年以前の地方農民の間から發生した原始宗教劇と文化・商業及び政治の中心地となつたアテナイ市民のために、芸術的天才が創作し、演出した、芸術演劇との距離は非常に大きいため、著者のように両者を切りはなして、後者を演劇芸術として研究しても何等矛盾を来さないと思う。而して周到精緻を極めたこの方面の研究に対しては殆んど異議の挟みようもない。第五章は「ギリシヤ演劇理論」の研究であつて、プラトンの「国家」「法律」等の對話篇中に散在する所見と、アリストテレスの「詩学」中にある見解に注意を集中し、特にカタルシス（浄化）の問題に焦点を向け、古今の見解を集めて論評し、これを倫理的の意味に解するものと、精神の医療的意味に解するものに分つて整理している。また戯曲は一つの場所、一日の出来事、一つの経過として構成さるべしとする「三統一」の法則は文芸復興期以後のフランス・イタリヤ等の劇作家及び学者の誤解に基づくものとし、最後にパリのド・コアラン文庫に所蔵されている「喜劇論」に注目し、純粹にアリストテレス的でない見解も混入しているが、紀元前第一世紀頃のギリシヤの喜劇論の重要文献として、妥当な位地を与えんと試みている。

ギリシヤ演劇史第二・三・四巻は現存せる作品の全部即ちアイスキュロスの七篇、ソポクレスの七篇、エウリピデ

スの十八篇、アリストパネスの十一篇、メナンドロスの五篇の喜劇の残存断片につき、各篇につき論述を試みている。著者が作品を取扱う態度は、まず個々の作品の「梗概」を述べ、分析的にその構造を示し、第二に「解釈」をする。著者は演出に興味をもち、梗概及び解釈に当つて、ギリシヤ劇場の舞台装置、背景等を詳細に想像し、登場人物をその想像の舞台の上で活躍せしめるので、著者の叙述は頗る生彩に富んでいる。著者はまたその間に於いて、古今の学者評論家のその劇に関する言説を広く収集し、その妥当性を批判しつつ、独断に陥ることなく、自己の見解を樹立し、「解釈」の後には、その劇の伝統をさぐり、その劇以前に於ける同じ人物或は事件に関する、神話、伝説或は詩句を網羅し、またその劇の影響を受けて書かれた、今世紀の初めに至るまでのイタリア、フランス、イギリス、ドイツ、スペイン、ポルトガル等の注目に値する作品を参照し、比較し、原作のヨーロッパ文学中に於ける意義及び価値を明かにしようとしてとめた。このような周到な態度の結果として、多少の見落しや、個人的な趣味によつて多少偏したところはあるとしても、著者の見解は概ね適切、正当であると信じられる。

ギリシヤ・ローマ演劇史第五巻はローマ演劇史概説である。ローマの演劇史は未だ行きとどいた研究の光を浴びておらず、日本の学者としてこれを詳細に研究したものは現著者以前には知られていない。これはローマの演劇がギリシヤの演劇の追従または模倣であつたと信じられているためでもある。しかしローマ悲劇はギリシヤから中世及び近世に進展するヨーロッパ悲劇への途上にあつて、重要な役割を演じてをり、またギリシヤ喜劇の流れを受け継いだローマ喜劇(特にパルリアタ劇)が近世ヨーロッパ喜劇への仲介者として重要な役目を果していることを力説した点、及び著者の関心が深く古代劇と近世劇との関連に向けられていることを看逃すことは出来ない。

著者はローマ演劇の本流の前提たるべき諸種の原始劇即ちエトルリア人のフェスケンニヌス演戯や、サトゥラ劇等について述べているが、ローマ劇の起源はギリシャ劇と同様確実に捕捉することは困難であり、問題は甚だ複雑である。これらの原始劇に関して著者がこれだけ叙述に努めた労力は多とすべきであるが、要するに、それらの演戯は研究の対象となるべき何物をも存せず、ローマ劇の支流たるに止まつている。従つて紀元前二四〇年頃ギリシャから輸入せられたローマ劇の本流の始まる頃から研究が進められて妥当であると思われる。

以上のローマ劇の本流については第五巻に詳しく述べてある。ローマ劇は悲劇と喜劇とに大別され、悲劇はギリシャ風なるクレピダタ劇とローマ風なるプラエテクスタ劇とに、また喜劇はギリシャ風なるバルリアタ劇とローマ風なるトガタ劇とに分類され、トガタ劇は更に騎士風なるトラベアタ劇と庶民的なるタベルナリア劇とに分たれる。そしてローマ悲劇がやがて外面化・誇大化に陥り、ギリシャ悲劇の高い生命を失いゆくに對し、ローマ喜劇はローマ人の庶民的趣味と結んで独自の發展をとげた事情を詳述し、そこには民族の性格や時代の情勢が強く働いたと論じている。著者は殊にバルリアタ劇(ギリシャ風喜劇)の叙述に力を注ぎ、その材料、性格、類型、構造について詳細に述べている。次に叙述は作品の残存していない諸作家の作品の解説に及び、特にギリシャ劇のローマ移入を確立した悲劇作家エンニウスについて詳細を極めている。次いでローマ劇場の具体的研究に入り、劇場成立の過程を概観し、元來崇神のためのギリシャ劇がローマに入つて全く庶民的な「見せ物」と化した変遷の過程を明かにした後、以上に伴い劇場構成の上につつた変化を、観客席、舞台、幕等に分けて詳述しているが、特に幕については精細な研究の成果が示されている。なお舞台装置、演技、俳優、合唱団、扮装、仮面等、劇場運営に関する面の叙述も詳細を極めている。

更に以上の諸研究には多くの文献のみならず、発掘資料や瓶絵の如き考古学的資料の研究成果も利用されていることが注目される。そうして最後に古代ローマの演劇理論についてホラティウス、キケロ、プルタルコス、ドナトゥス等の所説を紹介して、第五卷のローマ演劇史概観を終つている。

ギリシャ・ローマ演劇史第六卷はプラウトゥスの喜劇二十一篇、テレンティウスの喜劇六篇、（これらは皆今は失われたギリシャ喜劇の翻案である）、そしてセネカの作とされる十篇の悲劇（これらもギリシャ劇の翻案である）に関する解説である。これらは現存せるローマ悲劇の全部であるが、著者の研究及び解説の態度は二・三・四卷に於けると同じく、周到緻密を極めている。殊にプラウトゥスに関する記述は本巻の約半部を占め、彼の生涯及び作品二十一篇の詳細なる解説を始め、彼の個性及び時代の特徴よりギリシャ喜劇に対する彼の態度を論じ、後世へのプラウトゥス劇の影響にまで及んでいる。

最終の第七卷はギリシャ・ローマ演劇図録、全索引、総目次から成つている。三百七十に及ぶその図版は、それのみでも古代演劇の発展を語る貴重な重要資料であるが、それ等の蒐集に極めて不便な条件を克服して、劇場復原図や零細なる瓶絵の蒐集に尽された著者の努力を多としなければならない。

以上七冊で著者のギリシャ・ローマ演劇史は完結している。著者は初め全西洋演劇史を書く目的で、研究は中世にまで進んだが、それではいつ完了するか見当がつかないので、ギリシャ・ローマ演劇史をまとめたと第一巻の序文中に述べている。著者はまた近代の演劇及び演劇理論に関しても該博かつ親密な知識を有し、その透徹する識見を以て古典劇を理解し、生彩ある論述をしていることは本書の読者の看取するところであらう。また著者が古代劇場に関

し精細な研究をなし、その舞台の上に各個の劇を演出するように想像して、解説を書いたことは、読者の鑑賞を助ける効果が大きいが、著者が実際に演出を試みた経験に乏しい故を以て粗漏ではないかと疑われるかも知れないが、八十篇の各個の劇について矛盾を感じさせぬほど迄に考察を徹底せしめているので、演出家にとつても大いに参考となるであらう。

要するにこの書は我国の西洋文学研究者によつて遂行された、稀に見る力作であり、研究態度の真摯周到なること感嘆の他なく、我国の学界及び演劇界に貢献するところ大なりと信ずる。